思い出の小説＆映画

「復活の日」（1964 年小松左京作/1980 年 6 月映画公開：角川事務所・TBS）
「砂の器」（1960 年～1961 年読売新聞連載・松本清張作/1974 年 10 月映画公開）

世界的な感染症の問題が起こるたび、私はこの二つの作品を思い出さずにはいられない。前者は北高 1 年生時、松江に来たロードショウで、期間中何度も映画館に足を運んだ。読書好きで、特に推理小説や社会問題をテーマにした物語にのめり込んでいた頃。今の世界を予測するかのような衝撃的な作品だった。新型コロナウイルスの世界的蔓延と社会経済への影響と市民の混乱は、映画ではなく現実である。

後者はあまりにも有名であるが、これもハンセン病という感染症に対する差別・偏見をテーマにした作品で、奥出雲が舞台でもあり親近感も強く印象的な物語である。コロナウイルスの感染拡大と共に、市民どうしの信頼関係にまで影響を及ぼす状況を懸念している。

改めて、自身が医療の道に進むことを決めた理由のひとつは、北高時代に観た映画がきっかけだったのかもしれない。

今、医療現場は過去に経験のない状況の中で淡々と目の前の診療を続けるだけで精一杯であるが、この世界規模の感染症が示唆していることは何かを考える日々でもある。制限のある生活の中で、人生を振り返り、本当に大切なものは何かを考えている人も少なくないであろう。

嵯峨崎泰子（北高 35 期）

2020 年 5 月 1 日